

＜今週のお宝盤＞

受付期限：2026年2月25日

第9089番 マリア・カラスの『蝶々夫人』



蝶々夫人	カラス (S)
ピンカートン	ゲッダ (T)
スズキ	L. ダニエリ (M s)
シャープレス	ボニエッロ (B r)
ミラノ・スカラ座管&合唱団	
カラヤン	

税込3960円

英EMI / 33CX1296-8 / バラ3枚組 / 1955年録音 / モノラル / G

1955年はスカラ座のベルリン引っ越し公演で、カラスはカラヤン指揮で『ルチア』を歌い世界中に名をとどろかせた。この頃（32歳）からの数年間がカラスの全盛期と言われる。何故なら彼女のドラマティックな歌唱は喉を痛めやすいのである。蝶々さんは決してカラス向きの声でないのだが（例えばオペラ通のデュマゼール氏はM.キアーラを押しており、私はステージで観たソヴィエッロに圧倒された）。そのどちらも、16歳の主人公の純粹さを表現しているのだ。その意味でこれは、濃い性格描写は認めるが、カラス・ファン、あるいはカラヤン・ファンにとってのお宝である。我が子をしっかりと抱いて、離れさせた後自害に及ぶ場面の絶叫は確かに胸を打つが、蝶々さんはもっと繊細なはずであり、壊れやすい危うさがある。第1幕でのセリフ、「アメリカでは蝶々は針で刺されると言いますね」は、ブッソーニの言葉の選び方に敬服する。そうした心理を歌唱でも大切にして欲しい。カラヤンの弱音効果が最も美しい部分は『ハミング・コーラス』である。勿論ノルベルト・モーラというスカラ座の合唱指揮者の指導にもよるが最終的な表情付けはカラヤンによるものである。ニコライ・ゲッダは歌唱も真面目でピンカートンには合わない。ちょっと投げやりなパヴァロッティの方が良い。（山田）

第9090番 デヴィッド・マンロウ『中世・ルネサンスの楽器』



楽器解説書

税込13200円

英EMI / SLS 988 / 2枚組 / 1973-4年録音 / ステレオ / G

5ページの曲目解説と別に、96ページもの大部に及ぶマンロウ自身による楽器の解説書が付く。

この演奏は33歳で逝去したマンロウの形見であり、微に入り細に入り書かれた解説書は遺書とも言える。アンドレ・ブレヴィンが序文で述べているようにマンロウ以外にこれだけの演奏ができる者も、これだけの文章を書ける者も居ない。この録音の2年後、目覚ましい復興を遂げてきた古楽界は最も大切な柱とも言える若き先駆者を失ったのである。勢いに乗って山の如く録音された古楽演奏を前にして、この2枚組のレコードは正に「お宝盤」の名に恥じないと思う。中世から後期ルネサンスにかけての音楽は古い順に配列され、多くの写真集と共に楽しむことができる。勿論オリジナル楽器と精巧な復元楽器により、活気ある演奏が展開される。演奏はマンロウを中心としてホグウッドやタイラーなど多くのイギリスの奏者が加わっている。彼らにとどまらずこの録音の意味するところは大きかったのである。主眼は作品紹介以上に、タイトルにあるように楽器の紹介にある。解説書には個々の楽器の写真も掲載されており、私達は目からも耳からも確かめることができる。そうした目的からもこれだけの本が必要だったのだ。個人的にこれらの音楽を聴いていると、私はヘンデルに先立つイングランドの響きを感じる。伊仏独の作品も同じように取り上げられているのだが、イギリス人による演奏がそうなのか。（山田）